

鶴見岳・伽藍岳噴火レベル引き上げ2週間

専門家「継続的監視を」

別府、由布両市にまたがる鶴見岳・伽藍岳の噴火警戒レベルが、県内の山で初めて「2」（火山周辺規制）となつて間もなく2週間がたつ。気象庁がレベル引き上げを判断した今月8日は伽藍岳周辺で火山性地震が多発した。9日以降、揺れは観測されしていないものの、専門家は「継続的な監視が必要。身近に活火山があることを改めて認識し、県全体で備えを考えるべきだ」と指摘している。



別府市が設置した伽藍岳登山道への立ち入り禁止を告げる立て札。20日、別府市明養。撮影・田崎啓三

鶴成悦久教授 (45)は「今DIIサー(D)の鶴成悦久教授

福岡管区気象台によると、伽藍岳では8日未明から山体を震源とする火山性地震が発生。気象庁は5段階ある噴火警戒レベルを「1」（活火山であることに留意）から、初めて2に引き上げた。揺れは同日午後までに計92回観測した。20日午後3時時点で、新たな地震は起きていない。鶴見岳・伽藍岳は2020年から火山性地震が続いている。今回の震源は従来の鶴見岳から伽藍岳側に移っており、大分大減災・復興デザイン教育研究センター(CER)の鶴成悦久教授は「DIIサー(D)の鶴成悦久教授

地震 地下の熱水活動由来か

大沢信 教授 震を引き起

大沢信教授は「地下にある熱水の動きや圧力の変化が地震を引き起す」と説明する。一方の地熱のメカニズムに詳しい大沢信一・京都大教授(61)は「温泉水学・火山化学、大分大CERD客員教授は「地下の熱水活動に由来する地震と考えられる」との見方を示す。別府と似た温泉地の箱根温泉(神奈川県)の研究では、地下に



※福岡管区気象台の発表資料を基に作成

「このように考えられている」といふ。伽藍岳東側の地中にもマグマで沸騰した熱水と高温の蒸気が混じり合う「二相域」があると考えられる。地中1〜4キロの深さに集中した今回の震源域とも重なると思われる。

気象庁は鶴見岳・伽藍岳を常時観測の対象とし、24時間態勢で監視している。県は昨年12月、噴火を想定し、住民の広域避難を盛り込んだ避難計画をまとめた。鶴成教授は「今回のレベル引き上げを機に、火山防災の意識が広がってほしい。温泉などの恩恵とともに、リスクも知っておかなければならない。正確な情報、データを得て兆候をつかむために観測網の充実も望まれる」と語った。(百崎浩嗣)

国が2007年に噴火警戒レベルの運用を始めて以来、県内の山で2となるのは初めて。気象庁は「火山周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある」として伽藍岳の山頂南側にある爆裂火口から周囲約1キロの範囲では噴石や火砕流に警戒するよう呼びかける。県内はくじゅう連山(九重山)も警戒対象で、レベル1で推移している。